

らしゃめんの変容と戦後占領期文学における 羊の表象

—高見順『敗戦日記』・大江健三郎「人間の羊」を中心に—

江口 真規

本稿は、下記研究発表内容の一部に加筆及び修正を施したものである。

・ Eguchi, Maki. 'Representation of Sheep in the American Occupation Era: Rashamen (sheep) as a Figure for the Gendered/Sexualized Image of Occupied Japan in Ōe Kenzaburō's "Sheep" and Takami Jun's *Diaries*.' Workshop for Transpacific American Literature: Cold War Culture, Literature, and Spatial Imaginaries. Hitotsubashi University, Tokyo, Japan, March 8, 2014.

また、本稿第2節「らしゃめんの変容」の一部内容については、拙論「らしゃめんをめぐる物語の変遷——ジェンダー化された羊の表象に関する一考察——」（『比較文化研究』第115号、日本比較文化学会、2015年2月）において詳細な検討を試みている。

1. 問題提起

本稿では、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers, GHQ）の支配下にある日本の状況を描いた文学作品にみられる羊の表象が、どのような歴史的・政治的・文化的文脈において理解されるべきものであるのかを検討することを目的とする。

1945（昭和20）年9月のポツダム宣言調印から、1952（昭和27）年4月のサンフランシスコ平和条約発効に至る日本の戦後占領期を描いた文学作品では、しばしば羊の表象が用いられている¹。マイク・モラスキーは、『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』（2006）において、高見順（1907－1965）の1945年1月から12月までの1年間の日記を収めた『敗戦日記』（1959）からの引用と、占領期を舞台とする大江健三郎（1935－）の短編小説「人間の羊」（1958）の分析を通して、戦後日本の小説家が羊という象徴を用いて「日本の軍国主義者とアメリカの占領者の双方に対する、日本人の受動的な反応を表象している」²ことを明らかにした。また、村上春樹（1949－）の『羊をめぐる冒険』（1982）を中心

に日本近現代の文学作品における羊について論じた松枝誠は、戦後文学に関しては杉浦明平（1913 - 2001）の「子羊をねらう狼」（1954）も取り上げ、戦前から連続する恐怖政治、あるいは権力によって従順であることを強えられる日本人が「子羊」と呼ばれ、占領下にある日本が批判されていると分析する³。羊と称される対象、そして批判される対象は時代によって異なるが、羊は支配／被支配の構図を体現するものとして用いられていることを松枝は指摘している⁴。

しかしこれらの先行研究では、占領期以前に羊がどのように描かれてきたのか、日本文学にみられる羊の表象の歴史性については着目されてこなかった。日本における羊の歴史を検証するならば、近代以降の羊の表象の特徴として、女性というジェンダーを付与されてきた点に注意を喚起すべきである。例えば、日本語の「らしゃめん」⁵という言葉には、羊の意味に加え外国人の妾となった日本人女性の意味もある⁶ように、羊は多く女性を表すものとして描かれてきた。前述したモラスキーや松枝が指摘するような被支配者としての羊という意味においては、歴史的にみるならば、その指示対象は主に女性であったことがわかる。

これに対し、高見や大江の描く羊は、女性ではなくむしろ日本人男性が羊に喩えられている。彼ら日本人男性作家が描く羊は、それまで羊に付されてきた女性性をどのように受け継ぎ、あるいは反転させて用いられているのだろうか。本稿では、高見の『敗戦日記』と大江の「人間の羊」を中心に、これらの作品に描かれた羊の比喩が、占領期における日本人とアメリカ人の間のセクシュアリティやナショナリティの構図をいかに体現しているのかについて考察する。

そのためにはまず、日本における羊の表象のジェンダー性について検討することから開始したい。本稿では特に、この問題を考える上で興味深い事例を提供しているらしゃめんという語の意味とその物語受容の変遷に焦点を当て、羊が女性を体現するものであった点を明らかにする。

2. らしゃめんの変容

2-1. らしゃめんの意味と起源

元来日本に生息していなかった動物である羊の歴史を概観すると、主に明治時代以降欧化政策の一環として西欧から輸入された動物であることがわかるが、日本における羊の知識は中国や西欧からの間接的な情報を通して得られていた⁷。16世紀以降、ヨーロッパ船の渡来により羊毛製品の輸入が開始されると、羊に対する認識は動物そのものよりも羊毛製品と結びついていく。

このような経緯を反映しているのが、らしゃめんという語である。この言葉には、

毛織物の一種である「羅紗」^{らしじょう}⁸と羊という二つの意味があり、羊の不在という状況の中で羊毛製品と羊とが混同されていた背景が読み取れる。

しかし、近代以降らしゃめんの意味は、西洋人男性と日本人女性の性的な関係を示唆するものへと変容していく。1854（安政元）年の開国以降、らしゃめんは、日本に滞在する西洋人男性を相手とする日本人娼婦や妾を軽蔑する言葉として使用され始めた。さらに、開国期のらしゃめん女性の物語は、戦後占領期の駐留米軍兵士を相手とする「パンパン」と呼ばれた日本人街娼をめぐる言説に応用されていくこととなる。このようならしゃめんの意味の変遷過程について、以下で詳細に辿っていきたい。

第一に、らしゃめんという語の意味とその起源について検証する。先に述べたように、らしゃめんの意味は大きく次の二つに分けられる。第一に羊という意味、第二に日本に來ている西洋人の妾になった日本人女性あるいは外国人相手の日本人娼婦を卑しめていう語、という意味である⁹。

らしゃめんの語の初出は、日本で初めて綿羊飼育を行った人物とされる¹⁰平賀源内（1728 - 1779）の文集、風來山人著『風來六部集』（1780）にうかがえる。気候上の問題から飼育に失敗し皮膚病に罹った「綿羊」¹¹は見世物師の手に渡り、「らしゃめんなんど、あてじまいな名をつけ、絵具で体を塗りちら」¹²されて評判になったという¹³。このように『風來六部集』では、羊と同義である「綿羊」が「らしゃめん」と名付けられていることが読み取れる。

これに対し、19世紀中盤以降にみられる文献では、羊がらしゃめんと呼ばれていたことに加え、西洋人の妾の意味としても使用されていた点が確認される。例えば、江戸時代後期の風俗や事物について項目別に示された喜多川守貞著『守貞漫稿』（1853）における「ラシヤメン」の項をみてみよう。（以下、本稿における引用傍線部は引用者によるものであり、[]は引用者による注を示す。）

武州横浜にて西洋人の妾となる女を異名してラシヤメンと云。[中略]綿羊俗にラシヤメンと云ふ。洋人犬を堂に上し、又己が閨房中にも臥しむ。国人誤て洋夷は犬及綿羊を犯すと思ひ、其犬羊と同く、処女の夷妾となるを卑め、雑夫仮名を付て羅紗めんと云初しが、遂に通称の如くなる。¹⁴

当時は、西洋人が寢室にも犬を入れる習慣から、西洋人は犬および羊を犯すという誤解が生じていたようである。その犬や羊と同じように西洋人に犯される者という意味から、外国人の妾となった者が卑しめられて「羅紗めん」と呼ばれ始めたことがわかる。

開港期の横浜にまつわる談話が収録された菊苑老人著『美那登能波奈横濱奇談』(1861 - 1865 頃)においても、『守貞漫稿』と同様に、西洋人の獣姦¹⁵の噂とらしゃめんの語源との関連が次のように記述されている。

異人の妾となりし女をさして、ラシヤメンと唱ふるなり。此名を負ひし元といふは、異人彼国より連れ渡りしラシヤメンといふ獣あり。其性素直にして、よく人に馴れしたしむものなり。船中にてマドロスども、下官下部を云ふ。[上付ママ]煩惱きざしたるとき、此獣をとらへておかす事ありとぞ。此故に異人に犯さるゝの義よりして、ラシヤメンといひならいせしも理なり。¹⁶

この引用からも、異国から連れて来られた「獣」である羊が「ラシヤメン」と呼ばれていたとともに、西洋人水夫が航海中に羊を犯すという伝聞をもとに、「異人の妾」が「ラシヤメン」と称された経緯をうかがうことができる。

以上の 18 ~ 19 世紀に記された文献からは、らしゃめんの語が単に羊という動物を表す語から、外国人の妾となった日本人女性の意味へと変遷していった系譜を知ることができる。この過程において、らしゃめんの本来の意味であった羊は女性性と結び付けられ、羊の表象はジェンダー化されていくことになる。

2 - 2. 文学作品に描かれたらしゃめん

外国人の妾が総じてらしゃめんと呼ばれていた時代から、在日外国人の数が増加し制度的に日本人女性が仕えるようになると、らしゃめんの示す女性もより具体性を帯びるようになった¹⁷。横浜の開港とともに 1859 (安政 6) 年に開業された港崎遊郭^{みよがさ}においては、外国人一人を相手として限定した遊女がらしゃめんと呼ばれた¹⁸。港崎遊郭におけるらしゃめんの実態については竹下修子らによる研究が詳しいが¹⁹、外国人相手の娼婦となることが恥ずべきものとされた時代にありながらも、破格の報酬を求めて貧しい女性達が遊郭に集まったという²⁰。彼女達は日本人相手の遊女とは一目で違いがわかるような派手な衣装や、西洋人を通して得た羊毛製品(羅紗)を身に付け、日本人男性と関係を持つことは禁じられていた²¹。

このような開国期のらしゃめん像は、文学作品の中で繰り返し悲劇の主人公として描かれてきた。らしゃめんに関する言説として今日でも人口に膾炙しているのは、初代駐日公使タウンゼント・ハリス (Townsend Harris, 1804 - 1878) の妾といわれた唐人お吉の物語である²²。お吉については、らしゃめんとして軽蔑された果てに酒に溺れ自害した話が伝えられているが²³、1920 年代後半から 30 年代には小説や戯曲において「お吉熱」²⁴ともいわれる唐人お吉ブームが起こり²⁵、十一谷義三

郎（1897 - 1937）や真山青果（1878 - 1948）、山本有三（1887 - 1974）らがお吉を題材とした作品を次々と発表していった²⁶。これらの作品では、らしゃめんと羊との直接的な関係性は影を薄めているものの、その言葉は侮蔑語として強調されている。例えば、真山青果の『唐人お吉と攘夷群』（1931）では、「唐人お吉だ、ラシヤメンと……、世間一体に爪弾きされて」²⁷というお吉の台詞がみられるように、「ラシヤメン」という呼び名が広い世代の間で人を蔑むものとして用いられていたことがわかる。

外国人の妾を示す言葉であつたらしゃめんは、明治時代には、洋学を修める女学生や外国人と行動を共にする女性に対する呼称としても使用されるようになる。例えば、小栗風葉（1875 - 1926）の『恋慕ながし』（1898）では、娘を女学校に通わせる父親が洋学を修める彼女のことを自慢げに話すのであるが、これを聞いた話相手は「遊芸なら、手習なら、全然舶来仕立てにして置いて、ラシヤメンにでもして夥多^{ドル}弗を奪取らうと云ふ山だね」²⁸と返答している。また、夏目漱石（1867 - 1916）の『彼岸過迄』（1912）においては、西洋人のように背の高い男性に付き添う女性が「洋妾^{らしゃめん}」²⁹と表現されている。らしゃめんは、西洋人男性との実質的な性交渉の有無に関わらず、西洋文化との接点を持ち、高額報酬を手にし華美な服装をした女性を表すものとなっていたのである。

2 - 3. らしゃめんとパンパンの比較

開国期のらしゃめんをめぐる言説は、その指示対象を変化させながら戦後社会にも継承されていった。特に戦後の占領期においては、日本駐留の米軍兵士を相手とした日本人娼婦であるパンパンと同義の言葉として機能していたことがわかる。

パンパンとは、第二次世界大戦後の日本において進駐軍相手の街娼を指した語である³⁰。彼女達はチョコレートや缶詰などのアメリカ製品を手にし、ネッカチーフやフレアスカート、濃い口紅やハイヒールといった派手な服装をしていた³¹。このような境遇の類似点から、戦後占領期には、国のために自分の身体を売った開国期らしゃめんのイメージがパンパンに適用され、らしゃめんとパンパンが同一化されることがあった。唐人お吉物語の受容の変遷を調査する齊藤愛は、進駐軍相手の娼婦の表象にお吉のイメージが召喚された点について言及している³²。この傾向は、日本政府によって1945年8月26日に設立された特殊慰安施設協会の次のような設立声明文に顕著に表されているといえよう。

「昭和のお吉」幾千人かの人柱の上に、狂瀾を阻む防波堤を築き、民族の純潔を百年の彼方に護持培養すると共に、戦後社会秩序の根本に、見えざる地下の

柱たらんとす。³³

このようならしゃめんとパンパン、その中でも特に相手を一人に限定した「オンリー」³⁴との類似点に着目した竹下は、西洋人の妾や娼婦となった女性達が、男女間そして国家間の勢力関係において弱者とされた存在であることを主張している。

時代背景のほか、実態などにおいても、らしゃめんとオンリーには共通点が多いことがわかる。[中略]らしゃめんとオンリーには、男女間の勢力関係に加えて、国家間の勢力関係が深くかかわっていることがわかる。つまり、彼女たちは弱者である女性であり、弱者である日本人であったのである。³⁵

以上で論じてきたように、開国期以降の日本近代社会では、らしゃめんをめぐる言説と関連して羊は女性として比喻される傾向があった。らしゃめんと呼ばれる女性は時代と共に変遷し、その語源である羊のイメージは直接的には喚起されなくなる。しかし、戦後占領期にはパンパンがらしゃめんと同一化されたように、らしゃめんという言葉は西洋人男性と日本人女性という異人種間のセクシュアリティを示唆するものとして残されていった。上記の竹下の引用では、彼女達がジェンダーとナショナリティの勢力関係双方において弱者として配置されていた点が指摘されている。

しかし、このように外国人男性を相手とする日本人娼婦がらしゃめんとして羊に喩えられてきた歴史がある一方で、戦後占領期を描いた文学作品の中には日本人男性が羊として表された描写が見受けられる。次節では、前述した占領期を題材とする二つの作品、高見順の『敗戦日記』と大江健三郎の「人間の羊」における羊の比喻の分析を通して、弱者としての羊に付与されたジェンダーとその意味がどのように変化しているのかを考察していきたい。

3. 去勢された羊——戦後占領期における日本人男性の表象

3-1. 高見順『敗戦日記』(1959)

まず、先述したモラスキーが引用する『敗戦日記』において、羊について述べられる箇所を確認したい。モラスキーによる『敗戦日記』からの引用、「日本人はある点、去勢されているのだ。恐怖政治ですっかり小羊の如くおとなしい」³⁶という文章は、1945年10月5日の日記にみられる。この日、雑誌『ライフ』(Life)でムッソリーニ(Benito Mussolini, 1883 - 1945)の死体写真を見た高見は、イタリア

国民のムッソリーニへの憤激と日本国民の東条英機（1884 - 1948）への態度を比較して次のように記している。

日本人はある点、去勢されているのだ。恐怖政治ですっかり小羊の如くおとなしい。怒りを言葉や行動に積極的に現わし得ない、無気力、無力の人間にさせられているところもあるのだ。東条首相を逆さにつるさないからといって、日本人はイタリー人のような残虐を好まない穏和な民とすることはできない。

日本人だって残虐だ。だって、というより日本人こそといった方が正しいくらい、支那の戦線で日本の兵隊は残虐行為をほしいままにした。

権力を持つと日本人は残虐になるのだ。権力を持たせられないと、小羊の如く従順、卑屈。ああなんとという卑怯さだ。³⁷

ここでは、「去勢」された日本人が従順な「小羊」として表現されており、戦時中の統率者に対する怒りを露わにすることのない日本人の無気力さが非難されている。

しかしこの前後の日記を読むならば、「去勢された日本人」と「従順な小羊」という表現の背景には、政治的態度だけではなく、アメリカ人男性と日本人女性の性交渉を傍観する日本人男性の視点があることがわかる。例えば、同年8月28日と29日の日記には、警視庁によって特殊慰安施設協会が準備されるにあたり、その希望者が決して少なくないという事実が複雑な心境で綴られている。

警視庁から占領軍相手のキャバレー〔特殊慰安施設協会〕を準備するようにと命令が出たこと。「淫売集めもしなくてはならないのです、いやどうも」「集まらなくて大変でしょう」「それがどうもなかなか希望者が多いのです」「へーえ」³⁸

占領軍相手の「特殊慰安施設」〔中略〕接客婦千名を募ったところ四千名の応募者があって係員を「憤慨」させたという。³⁹

また、同年9月2日の日記には、横浜で米兵の強姦事件があったという噂に対して「敗けたんだ。殺されないだけまだ」「日本兵が支那でやったことを考えれば……」⁴⁰と反応する日本人男性の姿も描かれている。

このように敗戦後数カ月の高見の日記には、戦後の政治政策として日本人女性を娼婦として利用する日本人男性の卑劣さや、敗戦国民としてそのような状況を受け

入れざるを得ない無力さが記録されている。自発的に娼婦となる日本人女性や強姦を行う米兵の様子を、高見自身は客観的に描写するだけで自分の意見を述べることは稀である。傍観者でしか有り得ない日記の書き手である高見自身を含む日本人男性の無力さは、戦時中の日本兵の残虐性と比較され、さらに強調されている。このように高見の日記を読み直すならば、去勢され従順でおとなしい「小羊」という表現は、日本人の中でも特に男性を示すものであることがわかる。

3-2. 大江健三郎「人間の羊」(1958)

次に、占領期に描かれた羊の比喩の代表的なものとしてモラスキーや松枝が取り挙げている、大江健三郎の「人間の羊」について分析する。『敗戦日記』と同様、「人間の羊」においても、羊は日本人男性を表していると指摘できる。

「人間の羊」のあらすじは次のようなものである。主人公の学生である「僕」は、フランス語を教えるアルバイトからの帰り道で外国兵⁴¹と日本人女性が座ったバスに乗り合わせる。この女性が「僕」に歩み寄ったことをきっかけに、彼は外国兵にナイフで脅迫され、他の乗客とともにズボンを脱がされる。外国兵たちは乗客の尻を叩きながら、「羊撃ち、羊撃ち、パン パン」⁴²と歌い、尻を露わに屈んだ乗客は「《羊たち》」「《羊》」⁴³と表現される。

外国兵と日本人女性の降車後、バスの前部に座り辱めを免れた教員と他の乗客たちは、この事件を警察に訴えるよう《羊たち》に勧める。しかし、《羊たち》にはそのような意志はなく、ただ沈黙を貫くばかりである。バスを降りて帰宅しようとした「僕」は教員に交番に連れて行かれるが、警官はこの事件を真面目に取り扱おうとはせず、二人を追い返す。家に帰ろうとする「僕」を教員は一晚中追いまわし、「兵隊にも、お前たちにも死ぬほど恥をかかせてやる」⁴⁴と、怒りで震える声で次のように訴える。

ねえ、君、と彼[教員]は訴えかけるように切実な声でいった。誰か一人が、あの事件のために犠牲になる必要があるんだ。君は黙って忘れたいだろうけど、思いきって犠牲的な役割をはたしてくれ。犠牲の羊になってくれ。⁴⁵

このように「人間の羊」では、その題名を含め小説全体で羊の比喩が象徴的に利用されている。モラスキーは、日本人乗客たちの屈辱が描写される際に「小動物」⁴⁶「四足の獣」⁴⁷といった動物のメタファーが多用される点を明らかにしたが⁴⁸、動物の中でも特に羊の象徴性が強調されている理由については追究していない。しかし、前節において詳述したような日本における羊の表象の歴史を考慮する

と、らしゃめんやパンパンとして表されてきた女性としての羊のイメージが、この作品にも喚起されていると考えられるのではないだろうか。

この仮定に基づき「人間の羊」における男女間の構造をみってみるならば、らしゃめんとして弱者である女性のイメージを付与されてきた羊は、この作品では男性を表すものに変化していることがわかる。モラスキーは、外国兵に抵抗する唯一の声を持つ存在である乗客の女性に対して、外国兵を前にした日本人男性の言語的不能と性的不能を結び付けているが⁴⁹、ここでは、外国兵・日本人女性・日本人男性によって構成されるバスの中の世界におけるこの女性の存在位置について検討してみよう。この唯一人の日本人女性は、決して無力な犠牲者としては描かれていない。「羊撃ち、羊撃ち、パン パン」という歌のフレーズには、「パンパン」という銃撃の擬音語の他に、前述した日本人娼婦を示す言葉としての「パンパン」の意味も含まれるだろう。ここからは、明示されることはないが彼女がパンパンであることが想定される。しかし彼女は、羊のように従順で無力な存在ではない。バスの中で「唾」⁵⁰のように黙り何もしない日本人男性が《羊》となるのに対し、この女性は外国兵に向かって次のように言い放つ。

あたいはさ、東洋人だからね、なによ、あんた。しつこいわね、と女はそのぶよぶよする躰を僕におしつけて日本語で叫んだ。甘くみんなよ。⁵¹

「背の低い、顔の大きい」⁵² その女性は、兵隊達の膝に乗り騒ぎ外国兵を罵倒するだけではなく、外国兵とともに日本人の《羊》を揶揄さえもする。彼女は、「破れかぶれのように声をはりあげて外国兵たちの歌に合唱しはじめ」⁵³、「生きいきして猥らな表情」⁵⁴で《羊》たちを見ている。《羊》たちに対する辱めが行われるこの場面では、アメリカ人対日本人の対立や、モラスキーが指摘する「占領者と被占領者間の支配関係が日本人同士の関係へと複製される様子」⁵⁵ではなく、アメリカ人男性・日本人女性対日本人男性という構図が見受けられるのである。

このように「人間の羊」の羊は、女性と比較して無力な日本人男性を表象しているのであるが、「犠牲者」としての日本人男性（《羊》）同士のホモソーシャル⁵⁶な連帯を構築するものともなっている。例えば主人公の「僕」は、バスの中で同じ《羊》として辱められた「勤人」⁵⁷に対してホモソーシャルな連帯感を抱いていることが、次の引用から読み取れる。

ガラスを掌でぬぐって、勤人が僕を見ようとしているのが白っぽくバスの後尾にかんんでいた。僕は、肉親と別れるような動揺を感じた、おなじ空気のなか

へ裸の尻をさらした仲間。しかし僕はその賤しい親近感を恥じて、ガラス窓から眼をそらした。家の暖かい居間で僕を待っているはずの母親や妹たちの前へ帰って行くために僕は自分をたてなおさなければならなかった。僕は彼女たちから、僕の躰の奥の屈辱をかぎとられてはならない、と考えた。⁵⁸

ここでは、《羊》となった犠牲者としての日本人男性の間におけるホモソーシャルな関係性が示唆されている⁵⁹。

「羊」という表現を通したホモソーシャルな連帯性のイメージは、《羊》となった日本人男性の間だけに広がるものではない。獣姦というメタファーを通して、外国兵と日本人男性との間にも当てはめられる。「人間の羊」にみられる外国兵の身体に関する描写には動物の表現がつきまとう⁶⁰が、例えば、日本人女性は外国兵に向って次のように言い放つ。

あんたたち[外国兵]の裸は、背中までひげもじゃでさ、と女はしつこく叫んでいた。あたいは、このぼうや[「僕」]と寝たいわよ。⁶¹

あんたたち、牛のお尻にでも乗っかりなよ、あたいはこのぼうやと、ほら。⁶²

この女性の言葉からは、外国兵の身体と日本人男性のそれとが比較されることによって外国兵の身体の獣性が強調されており、人間を対象としない外国兵の性交渉が仄めかされている。また、外国兵がバスの中の日本人男性のズボンを脱がせ《羊》にさせることについては、バスの乗客から次のような声が挙がっている。

女の尻をまくるのなら話はわかるが、と道路工夫のように頑丈な靴をはいた男が真面目に腹をたてた声でいった。男にズボンを脱がせてどうするつもりなんだろう。⁶³

これらの引用では、日本人男性のズボンを脱がし座らせる外国兵の行為が肛門性交と結び付けられている。そして、外国兵の肛門性交の受け手となる日本人男性が《羊》と呼ばれることは、すなわち外国兵が《羊》を犯す獣姦の行為であるとも読み取れる。

「人間の羊」だけではなく、大江健三郎の作品における羊は、ホモセクシュアリティ⁶⁴や獣姦といったソドミー⁶⁵を表象する動物として機能している点についても合わせて言及しておきたい。例えば、『個人的な体験』(1964)には、主人公鳥の^{パード}

旧友でかつてアメリカ人男性の情人であったゲイバーの経営者、菊比古が登場するが、彼は「羊みたいに潤んだ眼」⁶⁶をもつ人物であるという。

このように「人間の羊」における羊に着眼すると、《羊》となった日本人男性同士や、獣姦行為の比喩を通した外国兵と日本人男性の間におけるホモソーシャルな連帯性が読み取れる。それはあたかも、らしゃめんの語源に西洋人男性の獣姦という伝説が含まれていたことを思い起こさせるようである。「人間の羊」では、外国兵の性行為の対象となりうる《羊》が描かれているのであるが、それは日本人女性ではなく日本人男性である。この意味において、犠牲者あるいは弱者として表象されてきた羊のもつ女性性がここでは男性に当てはめられており、高見が日記に記した「去勢された」男性性の表現と通じている。しかしまた、外国兵と日本人の間に形成されたホモソーシャルな連帯から疎外された日本人女性も、パンパンとして犠牲者の羊に表象される人間の一人であるという解釈も可能であろう。

4. 結論

以上本稿では、日本における羊の表象のジェンダー性に着目し、戦後占領期を描いた文学作品にみられる羊の描写を分析した。日本において羊は、らしゃめんの語に表されるように、女性としてのジェンダーを付与されて表象されてきた経緯が見受けられる。開国期のらしゃめんをめぐる言説は、戦後占領期には米兵を相手とするパンパンと重ね合わされ継承されていった。このように女性としてジェンダー化された羊のイメージを、セクシュアリティとナショナリティの視点から捉えるならば、海外との接触の中で弱者として置かれた国家の立場と、その中で西洋人男性に身を売ることを余儀なくされた女性の立場が反映されているといえる。

その一方で、高見順の『敗戦日記』や大江健三郎の「人間の羊」を例とする占領期を描いた日本人男性作家の文学作品では、日本人男性が「去勢された」羊に喩えられている。らしゃめんのように、外国人男性との性的・経済的關係と日本社会内部という二重の意味での被支配者として描かれてきた羊は、ここでは女性ではなく、むしろ政治的かつ性的にも無能な男性を表している。対照的に、戦後のらしゃめん女性とも考えられるパンパンの女性は、「人間の羊」ではむしろ支配者である外国兵と立場を同じくし、外国兵とともに日本人男性を《羊》にすることで彼らを見下し蔑んでいる。高見や大江の描く男性像では、羊の比喩の対象となることにより、これまでらしゃめんとして羊に付与されてきた犠牲者あるいは弱者としての女性性が強調されているのである。

このようならしゃめんの変容や戦後占領期の羊の表象からは、日本において羊は

異性間の性的再生産に連結しない身体交渉を示唆する動物でもあったということができらる。 「人間の羊」における日本人男性、つまり《羊》に対する外国兵の辱しめの行為は、らしゃめんの語源に含まれる西洋人男性の猥褻という言い伝えを想起させる。外国兵と日本人男性のこのような仮想の身体的接触に加え、犠牲者となる日本人男性の《羊》の群れに注目するならば、羊はまた日本人女性の存在を排除した男性同士のホモソーシャルな連帯を示すものでもある。

注

- 1 マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』（鈴木直子訳、青土社、2006年）303頁。
- 2 同上。
- 3 松枝誠「羊をめぐる冒険」論——北海道から満州、そして戦後——（『論究日本文学』第86号、55－66頁、立命館大学日本文学会、2007年5月）55頁。
- 4 同上。
- 5 「らしゃめん」には「羅紗綿」「羅紗緬」「綿羊娘」「洋妾」などの漢字が当てられる（新村出編『広辞苑 第6版』（岩波書店、2008年）2926頁、横浜市役所編『横浜市史稿 風俗編』（横浜市役所、1932年）334頁）が、本稿ではこれらの語義の変化を検討する点から、便宜上「らしゃめん」として平仮名表記を用いることとする。
- 6 新村編、前掲書、2926頁、木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』（皓星社、2000年）1325－1326頁。
- 7 日本における羊の歴史についての概略は、山根章弘『羊毛文化物語』（講談社、1989年）15－21頁を参照した。
- 8 「羅紗」は羊毛で織った厚地の毛織物の一種であり、ポルトガル語の“raxe”または“raixa”、あるいはオランダ語の“laken rassen”に由来する（前田富祺『日本語源大辞典』（小学館、2005年）1162頁、あらかわそおべえ『角川外来語辞典 第2版』（角川書店、1977年）1420頁）。「羅紗」という漢字には、上等の薄織物（羅）と薄物（紗）という語義があるが、羊毛との関連性はない（山根、前掲書、20頁）。
- 9 注6を参照のこと。
- 10 山根章弘『羊毛の語る日本史——南蛮渡来の洋服はいかに日本文化に組み込まれたか』（PHP研究所、1983年）19頁。
- 11 風来山人『風来六々部集』（国民図書株式会社編『近代日本文学大系 第二十三巻』709－836頁、国民図書株式会社、1926年）733頁。なお、本稿においては、引用文の旧漢字は新漢字に改めた。

- 12 同上。
- 13 山根『羊毛の語る日本史』前掲書、20頁。
- 14 喜多川守貞『守貞漫稿 中巻』（朝倉治彦編、東京堂出版、1973年）95頁。
- 15 人間と他の生物種との性的行為を示す獣姦（bestiality, zoophilia）の対象となる動物としては、法廷議事録や精神分析医の統計に基づくと、第一に牛が挙げられるが、その他にも馬、山羊、羊、豚、犬などがいるという（フロリアン・ヴェルナー『牛の文化史』（白井隆一郎訳、東洋書林、2011年）53頁、Andrea M. Beetz and Anthony L. Podberscek, eds, *Bestiality and Zoophilia: Sexual Relations with Animals* (West Lafayette: Purdue UP, 2005) 1-19.
- 16 菊苑老人『美那登能波奈横濱奇談』（錦港堂、1861 - 1865年頃）21頁。
- 17 竹下修子『国際結婚の社会学』（学文社、2000年）13、20頁。
- 18 同上。
- 19 港崎遊郭における「らしゃめん」の実態については、竹下、前掲書、12 - 18頁、荒木誠三『らしゃめん』（大陸書房、1982年）8 - 32頁を参照した。
- 20 中里機庵『幕末開港綿羊娘情史』（赤燼閣、1931年）、183頁。
- 21 同上、171頁。
- 22 齊藤愛「被害者か、英雄か——「唐人お吉」の旅、日本、ヨーロッパ、そして日本へ——」（『文学研究論集』第31号、17 - 33頁、筑波大学比較・理論文学会、2013年2月）17頁。
- 23 同上、18頁。
- 24 山本有三『女人哀詞 唐人お吉物語』（山本有三『山本有三全集 第二巻』459 - 663頁、岩波書店、1940年）661頁。
- 25 齊藤、前掲書、17頁、佐相勉『溝口健二・全作品解説8 『唐人お吉』から『満蒙建国の黎明』へ』（近代文芸社、2010年）6頁。
- 26 十一谷義三郎『唐人お吉』（1928）・『時の敗者 唐人お吉』（1929）、真山青果『唐人お吉』（1930）・『唐人お吉と攘夷軍』（1931）、山本有三『女人哀詞 唐人お吉物語』（1933）等が挙げられる。また、十一谷の『時の敗者 唐人お吉』は、溝口健二（1898 - 1956）によって『唐人お吉』として映画化され人気を博した（佐相、前掲書、61頁）。
- 27 真山青果『唐人お吉と攘夷群』（真山青果『真山青果全集 第六巻』144 - 286頁、講談社、1976年）159頁。
- 28 小栗風葉『恋慕ながし』（平凡社、2008年）43 - 44頁。
- 29 夏目金之助『彼岸過迄』（夏目金之助『漱石全集 第七巻』（岩波書店、1994年））133頁。
- 30 新村編、前掲書、2326頁、あらかわ、前掲書、1022頁。「パンパン」の語源は不詳であるが、米軍兵士が夜に花街の表戸を叩いた音、日本海軍によるサイパン島占領の際に日本水兵がサイパン島の女性をパンパンと手を打って買淫したこと、若い女性が食べ物を

- ねだり「パン、パン」と哀願したこと、性交を意味する“pom pom”という米軍内の卑語が「パンパン」と聞えたこと、等が挙げられる（前田、前掲書、934頁、竹下、前掲書、90頁）。
- 31 竹下、前掲書、91頁。
 - 32 齋藤、前掲書、19頁。
 - 33 市川房枝編『日本婦人問題資料集成 第一巻 人権』（ドメス出版、1978年）536頁。
 - 34 あらかわ、前掲書、234頁。
 - 35 竹下修子「日本人女性と外国人男性の関係の歴史——らしゃめんとオンリーの比較から——」（『歴史民俗学』第11巻、178-195頁、批評社、1998年7月）194-195頁。
 - 36 高見順『敗戦日記』（中央公論新社、2005年）371頁。
 - 37 同上、371 - 372頁。
 - 38 同上、338頁。
 - 39 同上、340頁。
 - 40 同上、345頁。
 - 41 この外国兵がアメリカ兵であることは作品中では明示されないが、その解釈が自明とされてきた点については大島丈志による指摘がある（大島丈志「「人間の羊」論——単行本「後記」から新たな読みの可能性へ——」（『近代文学研究』第21号、43 - 57頁、日本文学協会近代部会、2004年3月）45頁）。
 - 42 大江健三郎「人間の羊」（『大江健三郎全作品（第1期）1』139 - 156頁、新潮社、1994年）145頁。
 - 43 同上。
 - 44 同上、156頁。
 - 45 同上、153頁。
 - 46 同上、143頁。
 - 47 同上、144頁。
 - 48 モラスキー、前掲書、307頁。
 - 49 同上、300頁。
 - 50 大江、前掲書、148頁。
 - 51 同上、142頁。
 - 52 同上、141頁。
 - 53 同上、145頁。
 - 54 同上、143頁。
 - 55 モラスキー、前掲書、300頁。
 - 56 イヴ・K・セジウィックは、「ホモソーシャル」という概念を次のように定義している。「「ホ

モソーシャル」という用語は、時折歴史学や社会科学の領域で使われ、同性間の社会的な絆を表す。またこの用語は、明らかに「ホモセクシュアル」と類似を、しかし「ホモセクシュアル」との区別をも意図して造られた言葉である。[中略]「男同士の絆」を結ぶ行為を指すのに使用されているが、その行為の特徴は、[中略]強烈なホモフォビア、つまり同性愛に対する恐怖と嫌悪と言えるかもしれない(イヴ・K・セジウィック『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年)2頁)。

57 大江、前掲書、142頁。

58 同上、149頁。

59 この引用からうかがえるホモセクシュアリティを想起させるような「僕」の感情は、母や妹のいる家庭に帰ることで否定されるが、「人間の羊」における「家」の幻想性と核家族化の時代的背景については、大島による考察がある(大島、前掲書、53 - 56頁)。

60 モラスキー、前掲書、306頁。

61 大江、前掲書、142頁。

62 同上。

63 同上、147頁。

64 大江健三郎作品におけるホモセクシュアリティについては、キース・ヴィンセントらによる研究がある(ジェームス・キース・ヴィンセント「大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモファシズムとその不満」(竹内孝宏訳『批評空間』第II期、第16号、120 - 154頁、太田出版、1998年1月))。また黒岩裕市は、大江の『喝采』(1958)における男性同性愛表象について、戦争と外国からの影響により男性同性愛者が増加した時代背景とともに分析している(黒岩裕市「大江健三郎『喝采』の男性同性愛表象」(『フェリス女学院大学文学部紀要』第47号、151 - 164頁、フェリス女学院大学、2012年3月)152 - 154頁)。『喝采』と同年に発表された「人間の羊」についても、当時の男性同性愛をめぐる言説を検討する必要があるだろう。また、大江作品における獣姦については、「飼育」(1958)の黒人捕虜と山羊の関係性に関するモラスキーの指摘がある(モラスキー、前掲書、306頁)。

65 ソドミー(sodomy)は、キリスト教で原罪とされる動物との性交渉を示す言葉であったが、同性間の性行為など生殖を目的としない性行為全般を指す言葉として用いられてきた経緯がある(Beetz and Podberscek 23-24)。

66 大江健三郎「個人的な体験」(大江健三郎『大江健三郎全作品(第I期)6』203 - 370頁、新潮社、1994年)363頁。

参考文献

大江健三郎「後記」大江健三郎『死者の奢り』302 - 303 頁、文藝春秋新社、1958 年

太田久好『横浜沿革誌』東洋社、1892 年

佐藤忠男「対米感覚の戦後史——らしゃめん映画考——」『思想の科学』第 5 次、第 80 号、
93 - 102 頁、思想の科学社、1968 年 10 月